

7. しつけ言葉から探る「理想的」人間像

磨矢 順子（経済学部経済学科 4年）

指導教員

西嶋 義憲（経済学部経済学科 教授）

1. 背景と研究目的

「国際化時代」の現代、街中やテレビで外国人を見かけるのが当たり前となった。ところが私たちは、このような外国人を見ると違和感を覚えることがある。それは、場面ごとに期待される「理想的」な行動をとる人物像、すなわち「理想的」人間像が、日本人と外国人とは違うことによるのではないだろうか。本研究の目的は、その「理想的」人間像を、しつけ言葉を切り口にして明らかにすることにある。

しつけ言葉を切り口として設定した理由は、ドイツ人留学生との出会いにある。2003年9月から2004年9月まで、当ゼミに3歳の子どもをもつドイツ人留学生クールマン・ユリア氏が所属していた。日々の交流の中で、クールマン氏が子どもに対してとる態度や発する言語表現は、私たちが記憶しているそれとは違うといった印象を受けた。このことから、しつけ言葉が、価値観の形成に何らかの影響を与えているのではないかと考えたのである。

私はクールマン氏の日々のしつけの方法を観察する中で、次のような「理想的」人間像の仮説をたてた。

（日本） 周りの期待に配慮し、それに従う人間

（ドイツ） 自分で考え、それを基準に判断する人間

本研究では、この仮説を、アンケート調査を利用して検証する。

2. 研究方法

2.1 調査対象と調査実施方法

私は、しつけ言葉を集めるために、アンケート調査を行った。このアンケートは、両面刷りのものである。まず表面は、しつけにおいて重視する点を、選択肢の中から選んで回答させる内容である。

そしてアンケートの裏面は、特定の場面で、実際に子どもに発するであろうしつけ言葉を回答させるものだ。2005年3月に提出した報告書および同年7月1日の研究成果発表会では、アンケートの表面について分析した結果を報告した。よって今回は、裏面の回答を主な分析の対象とした。調査実施方法について、以下に説明する。

日本の「理想的」人間像の仮説を検証するために、今回は金沢市内にある幼稚園・保育園の保護者を対象に調査を実施した。調査概要は、次の通りである。

- ・調査対象 金沢市内（平和町、若松町、小立野）にある7つの幼稚園・保育園の保護者
- ・調査方法 記入式アンケート調査
- ・調査時期 2004年11月上旬～12月上旬
- ・回収数 347（回収率約40%）

ドイツの「理想的」人間像の仮説を検証するために、今回は東京横浜ドイツ学園の幼稚園の保護者を対象に調査を実施した。東京横浜ドイツ学園とは、在日ドイツ人の子どもが通う学校である。調査概要は、次の通りだ。

- ・調査対象 東京横浜ドイツ学園（横浜区茅ヶ崎）の幼稚園の保護者
- ・調査方法 記入式アンケート調査（金沢市内での調査と同内容のドイツ語版）
- ・調査時期 2005年5月下旬～6月上旬
- ・回収数 9（回収率約10%）ドイツ学園での調査に関しては、時間的制約があり、回収率が伸び悩む結果となった。しかしアンケートに回答した保護者の多くは、ドイツ人であり、現地の慣習に親しんでいると予想される。なおかつこれらの回答に、金沢市内での調査とは異なる傾向が見られたので、今回金沢市内での調査結果と比較可能だと判断した。

2.2 分析の観点

金沢市内でのアンケート調査と、東京横浜ドイツ学園でのアンケート調査の結果は、日独の「理想的」人間像の仮説を立証するものだろうか。分析については、次の3つの観点により行う。

①発話文の機能の比較 ②発話内言及人物の比較 ③特徴的表現の比較

これらを分析の観点とした理由を説明しよう。①は発話形式からどのような方法で子どもをしつけているのかという点、②は発話の際、誰に配慮しているのかという点を、それぞれ明らかにするための。③は日独で排他的に使われる特徴的な表現の有無を調べるためである。

3. 研究結果と考察

3.1 発話文の機能の比較

今回のアンケートは、ある指定された場面で保護者が子どもに発すると思われる文を、回答として記入するものである。発話文の機能は、しつけ言葉を発する意図を知ることがかりとなる。そのため、発話文の機能を、第一の比較の観点とした。まず、分類の観点を説明し、結果を報告する。

【分類の観点】

説明文；事態確認の文。「おいしそうだね。」「恥ずかしいよ。」「みんな遊んでるよ。」等

指示文；行動を指示した文。「貸してあげなさい。」「お礼を言おうね。」等

疑問文；

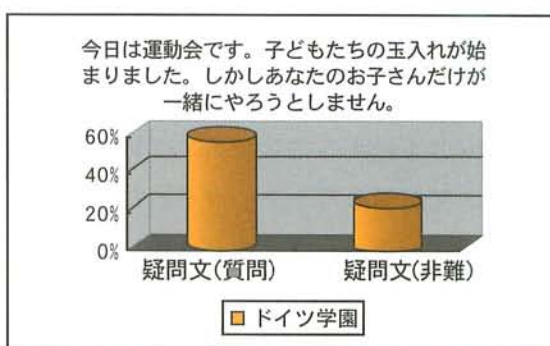
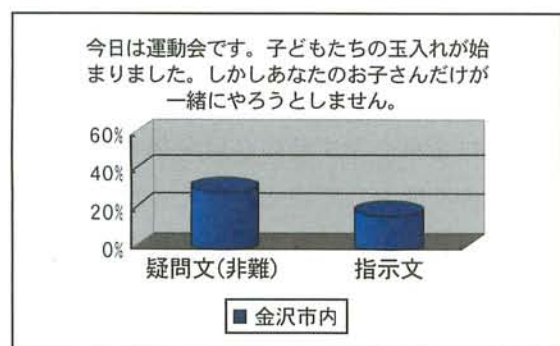
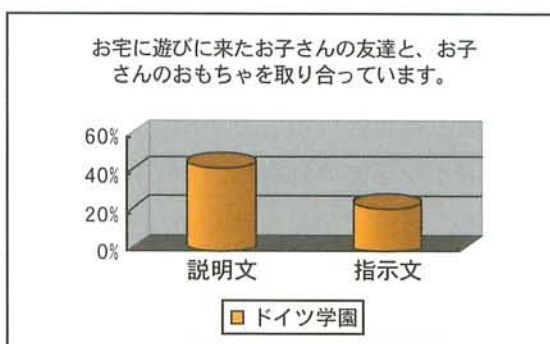
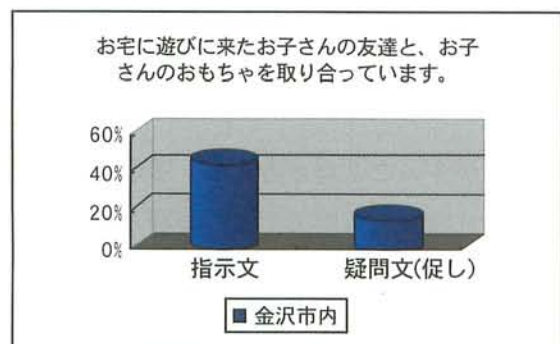
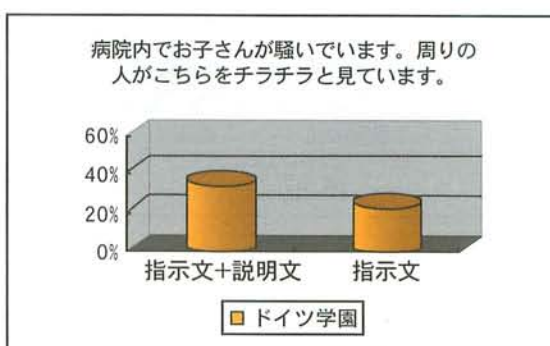
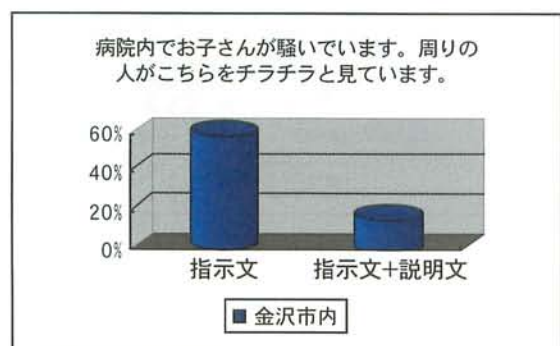
疑問文（質問）；理由などを尋ねる文。「どうしたの？」「今日はどうしたん？」等

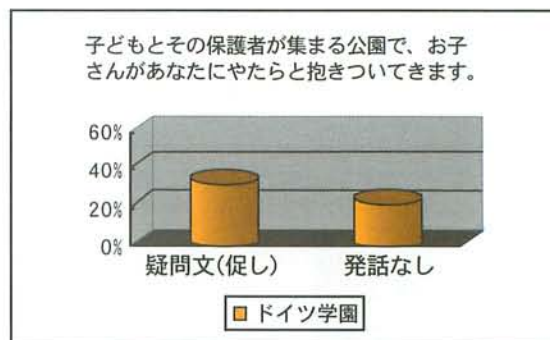
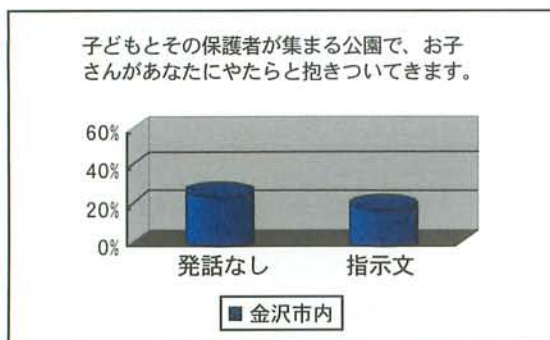
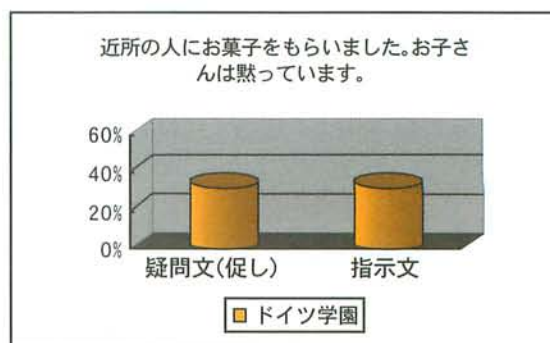
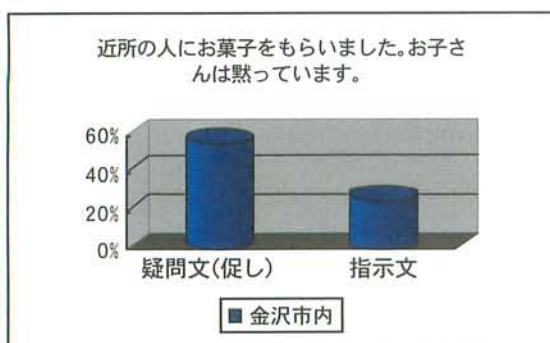
疑問文（促し）；行動を促す文。「一緒に遊べば？」「ありがとうは？」等

疑問文（非難）；問題場面の後に言う疑問文。「なんでせんかったん？」等

発話なし；何も言わないという回答。

【結果】 上位2つをあげ、グラフで比較する。





【考察】

金沢市内の特徴については、指示文が多いことだといえる。ドイツ学園では指示文が上位にない場面があるが、金沢市内では全場面で指示文が上位にあがっている。また、割合をみても、「近所の人にお菓子をもらいました。」の場面ではやや低くなっているものの、その他の場面では金沢市内の方が指示文の割合が高い。

次にドイツ学園の特徴については、疑問文（質問）が多いことだと考える。確かに、金沢市内でも、疑問文が見られるが、それは非難や促しを意図したものであり、純粋な質問からの言葉とはいえない。ドイツ学園では「今日は運動会です。」の場面で、疑問文（質問）が多くの割合を占めているので、金沢市内とは異なる特徴として捉えることが可能かと思う。

3.2 発話内言及人物の比較

しつけ言葉を発するのは、相手に様々な内容を伝えることを目的とする。しかし、あるひとつの内容を伝えるにしても、どのような内容のしつけ言葉を発するのは発話者によって異なる。発話者の考えや心理それに態度が、内容に大きく関与していると考えられる。本節では、発話の際、どの人物を考慮に入れているかという観点から、その心理的特色を探っていく。

【分類の観点】

次のような発話があったとする。「〇〇はみんなと遊ばないの？お母さんと一緒に遊ぶ？」

この発話で言及される人物（言及人物）は、下線部分の「〇〇」・「みんな」・「お母さん」ということになる。しかし、今回のアンケートは、保護者→子どもへの発話であるので、

「○○」（子どものなまえ）・「お母さん」（保護者）は、考慮に入れないこととする。すると、この発話では「みんな」のみが、この発話の言及人物ということになる。他方、「○○、どうしたの?」「静かにしなさい。」といった発話は、言及人物なしと捉える。

【結果】

問題場面別に表形式で結果を報告する。なお、表にあるオーディエンスとは、場面ごとに考慮される、周りにいるあるいは想定される関与者の人数を示したものである。例えば、病院の場面では、「周りの人」とあるので、オーディエンスは複数と想定される。また、おもちゃを取り合いする場面では、「友達」とあるので、オーディエンスは単数と考えられる。

	オーディエンス	言及人物あり	
		金沢市内	ドイツ学園
病院内でお子さんが騒いでいます。周りの人がこちらをチラチラと見えています。	複数	57%	44%
お宅に来たお子さんの友達と、お子さんのおもちゃを取り合っています。	単数	21%	22%
今日は運動会です。子どもたちの玉入れが始まりました。しかしあなたのお子さんだけが一緒にやろうとしません。	複数	16%	11%
近所の人にお菓子をもらいました。お子さんは黙っています。	単数	3%	11%
子どもとその保護者が集まる公園で、お子さんがあなたにやたらと抱きついてきます。	複数	48%	33%
最も高い割合と、最も低い割合の差		57%-3%=54	44%-11%=33

【考察】

まず、表の一番下の項目、最も高い割合と低い割合の差に注目してほしい。金沢市内では54、ドイツ学園では33となった。この差から、金沢市内の保護者は、場面によって柔軟に言葉を変えているといえるだろう。さらに、場面のオーディエンスと合わせて、割合をみよう。金沢市内の保護者は、場面のオーディエンスが複数だと、言及人物の割合も多く、場面のオーディエンスが単数だと、言及人物の割合も少なくする傾向がある。場面ごとの性質を察知し、発話をしているといえよう。他方、ドイツ学園の保護者は、場面の性質に、比較的影響を受けずに発話をしていることが特徴といえる。

3.3 特徴的表現の比較

本節では、ドイツ学園では見られなかった金沢市内での特徴的表現、逆に金沢市内では見られなかったドイツ学園での特徴的表現を取り上げ、分析していく。私たちが日常的に使用する言葉には、そのグループ特有の通念、すなわち、そのグループ内で当たり前と考えられている価値や基準が含まれていると考える。金沢市内とドイツ学園での調査における特徴的表現を比較することは、そのグループ特有の通念の解明に役立つはずである。なお、考察については、4. 結論で行う。

【結果】

金沢市内での回答のみにある表現

- ・今日は運動会です。子どもたちの玉入れが始まりました。しかしあなたのお子さんだけが一緒にやろうとしません。
→「がんばれー！！」という表現。

ドイツ学園での回答のみにある表現

- ・病院内でお子さんが騒いでいます。周りの人がこちらをチラチラと見ています。
→「あなたならもうちょっと静かに遊べるでしょ？」という表現。

4. 結論

(日本) 周りの期待に配慮し、それに従う人間

(ドイツ) 自分で考え、それを基準に判断する人間

①発話文の機能の比較 ②発話内言及人物の比較 ③特徴的表現の比較という観点から、アンケートの分析を行った。その分析結果は、日独の「理想的」人間像の仮説を立証するものだろうか。

(金沢市内)

- ①指示文が多い。→子どもに従わせる。
- ②場面ごとに言葉を変える。→周りの状況を子どもに分からせる。
- ③「がんばれー！！」という表現。→期待を分からせ、耐えさせる。

仮説を立証。

(ドイツ学園)

- ①疑問文(質問)がある。→子どもに考えさせる。
- ②場面ごとで言葉は変化しにくい。→常に自分の基準をもたせている。
- ③「あなたならもうちょっと静かにできるでしょ？」→自分の基準で行動させる。

仮説を立証。

今回の分析結果から判断する限り、「理想的」人間像の仮説は立証されたと言っていいだろう。それぞれの特徴をみると、金沢市内は外的基準の発話、そしてドイツ学園は内的基準の発話ということができそうだ。

本研究は、具体的なしつけ言葉の収集に始まり、言語学的な分析を行った。しかし、それに留まらず、通念の解明といった社会的な問題へと関心が広がっている。その点で、長期的に続けていく価値のある研究であるといえるだろう。

今回の調査は、日独の「理想的」人間像を検証するために、ある限られた地域内の限られた対象で調査を行った。しかし、この調査結果が、日本全般、そしてドイツ全体について一般的に妥当するかどうかは分からない。とくにドイツに関しては、今回は日本にあるドイツ学園で調査を実施したが、本来ならばドイツに出張して行うべきだったと考える。これらを反省点とし、日本ではさらに広い範囲の調査、そしてドイツでは現地の調査の実施を今後の課題とする。